しらかば

2015年夏号　第29号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる 2･7

電話 011-252-3411　FAX011-252-3412

URL: http://www.hokkaido-sien-center.jp

E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

中国帰国者一世の日本語教室から

帰国者の心支える日本語学習

一世の日本語教室は、いつも賑やかで明るい笑い声に充たされています。平均年齢が 75歳にもなる教室です。聞いてみると教室が、学習が「楽しい」という声がかえってきます。そして、「ぜんぜん覚えられない」と笑顔です。「子供の頃学校へ行けなかった。いまこうして『学校』で勉強できるのがうれしい」という人もいます。帰国者のみなさんにとって老後をどう生きるかというえでも日本語学習はとても大きな意味があるように見えます。

伝わるよろこび、生活に自信

「日本人だから日本語話せないとはずかしい」「日本人になるために」と言います。みなさんの中にある心のふるさとへのあこがれや、普通の人のように生きたいという強い思いが伝わってきます。長年労苦をともにしてきた配偶者のみなさんは、その思いをいっしょにしてやさしく見守り、手を取り合って、ともに学び続ける人が多いです。一世のみなさんの日本語学習では、歳は関係ありません。夢を実現させるために学びつづける教室はそのための大切な場所です。高齢学習で「覚えられない」といいますが、7年、8年の年数を重ねて、いまは口から自然に日本語が出てきます。コミュニケーションの力もついて、伝わる喜びを感じて生活する自信につながっています。

継続こそ力、生涯学習教室は今日も熱気にあふれています。日本語学習は、帰国者の心を支える中心的な事業です。

ごあいさつ

北海道中国帰国者支援・交流センター
所長　斉藤　昇

みなさんお元気でお過ごしですか。4月よりセンター所長に着任しました。

一世のみなさんは、老後生活や健康が心配でしょう。二、三世のみなさんは、仕事や進路に不安があるかもしれません。また、地域では孤立しがちでさみしさを感じることもあるでしょう。

センターは、みなさんの拠り所であるようにさまざまな事業を行っています。これからもみなさんの声に耳を傾けて、みなさんが地域で楽しく安心して生活してもらえるように努めていきます。

どうぞよろしくお願いします。

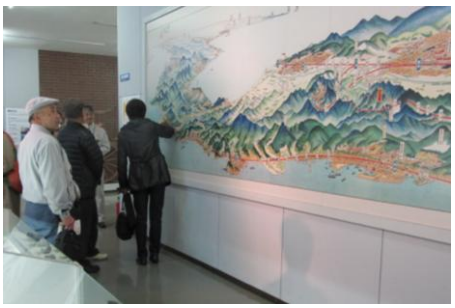
稚内で3月の介護学習会につづいて介護施設を知ろうと、5月12日、「養護老人ホーム富士見園」の見学会を行いました。午後からは、郷土を学ぼうと北方記念館を参観しました。参加したのは10名の樺太帰国者のみなさんです。見学会は、稚内市の協力を得て実現しました。NPO日本サハリン協会と協働事業で取り組み、道社会福祉協議会宗谷地区事務所の援助のもと実施しました。

稚内・介護施設と郷土を学ぶ見学会

あかるくてきれい、食事も体験、おいしい

養護老人ホームでは、濱塚施設長から施設の説明を聞き、続いて老人ホームの見学を行いました。帰国者のみなさんは「明るく清潔」「設備が整っていて便利そう」「ロシアは建物も古く寂しい暗いイメージ、全然違う」と語り、イメージが変わった様子でした。見学中には、利用者の居室を見て生活のようすなど話も聞かせてもらいました。中には「インターネットが使えますか」という質問まであって、理解を深めました。併設する介護が必要な人のための特別養護老人ホームやデイサービスセンターの見学もしました。お昼には施設の食事も体験。和食の煮魚のメニューに、味は口に合うかと聞いたところ皆さん「おいしい」との感想。見て、聞いて，味わい介護施設への理解を深めました。

生活の場所はこんなところ



午後からは、稚内公園の北方記念館で斉藤学芸員から稚内の歴史や風土の説明に、みなさん「おもしろい」と聞きいっていました。記念館には樺太の展示室があり、大きな樺太鳥瞰図の前で樺太のこと、それぞれ思い思いに語りあっていました。【写真左】記念館の見学に先だって開基百年記念塔の展望台からなつかしい「ふるさと」サハリンの島影を眺めることができました。稚内、宗谷地域は、帰国者のみなさんの生活の場所、どんな歴史や風土に囲まれて生活しているかを知る有意義な見学会になりました。

異文化体験　浴衣撮影会

思わず「日本人になれた！」笑顔

「日本人になれた！」、浴衣を着た「残留孤児」の第一声です。はじけるような笑顔です。6月29日、浴衣撮影会が行われました。参加したのは、中国帰国者と樺太帰国者のみなさん。今回は、女性だけの会です。ボランティアさんの着付け指導で、それぞれが選んだ浴衣を着ました。着付けしているときからみなさん大はしゃぎ、お互いに「きれい」「よく似合う」と笑顔で語り合います。そして、さっそく写真撮影、みなさんとっておきの笑顔でカメラに収まりました。感想を聞くと「うれしい」「日本人になれた」といいます。浴衣を着て、心にあるふるさと日本に包まれていたのでしょう。帰国者のみなさんの心の思いが伝わってきました。

旭川・介護施設の見学会と自然を学ぶ会　ボランティアさんといっしょに

介護施設・歌の交流の輪

ボランティアさんとの交流を続けてきた旭川で、老後問題に理解を深めようと介護施設の見学会を行いました。さらに午後からは大雪山の山麓に広がる自然施設「旭川２１世紀の森」を参観学習しました。この計画は、旭川市とボランティアさんの協力のもとに行われました。参加したのは、中国帰国者、樺太帰国者のみなさん７名、ボランティアのみなさん１０名です。

見学した介護施設は、小規模多機能ホーム「たいよう」です。代表の山本社長からあいさつがあり、続いて鎌田施設長から施設についての説明を聞きました。見学では、みなさん施設内の様子におおきな関心を示し見学していました。

施設長から利用者の皆さんに歌を聴かせてほしいとリクエストがあり、帰国者、ボランティアのみなさんが利用者の皆さんと輪になって座り歌の交流会になりました。【写真上】ボランティアさんのギター伴奏で「ふるさと」など皆で歌い、樺太帰国者のロシア語の「カチューシャ」の歌には「感動しました」との声も。また利用者のみなさんからの帰国者への質問もあり、交流を深める見学会になりました。

大雪山の大自然に気持ちのびやか

帰国者のみなさんは、清潔な明るい優しい施設に、それまでの老人施設へのイメージが変わったと介護制度への理解を深めました。

午後からは「旭川２１世紀の森」の参観学習、板東館長の大雪山の動物や植物、その自然の豊かさの話を楽しく聞かせてもらいました。屋外に出て、落ちている枝を集めてボールペンづくり、これは記念になると帰国者もボランティアもすっかり熱中。笑顔で会話も弾み、そのあと広大な施設内を参観してまわり、キタキツネの歓迎も受け、大自然のなか気持ちものびのび、楽しみながら郷土のことまたひとつ知りました。

日本サハリン協会　何回会えるか、会えてうれしい

日本サハリン協会の平成27年度の一時帰国事業が行われました。4月15日から25日までサハリンと大陸から12名の帰国者を迎えました。4月17日には歓迎会が行われ、センターから斉藤昇所長が出席してあいさつをしました。続いて、6月13日から23日までサハリンから18名の一時帰国団を迎えました。6月14日には歓迎会も行われました。親族と交流したみなさんは「これから何回会えるか分からない。会えるのがうれしい」「日本は夢の国」「妹に会いにきた。元気で安心した」など語り、「いつまでも感謝しています、また来たいです」と海を越えて行き来し、親族や友人に会える喜びを語っていました。

日本の家庭料理講習会

メニューはおでん、「だし」の食文化を学ぶ

6月1日、日本の家庭料理講習会を行いました。今回の家庭料理は「おでん」。和食の基本はだし、だしの食文化を学ぼうと「おでん」に挑戦しました。大根とたまごとちくわのシンプルなおでん、そして「肉巻きおにぎり」と「パプリカのごま和え」のメニューです。北ガスクッキングスクールで行われた講習会では、帰国者のみなさんにとっては異文化の味に興味しんしん。みなさん、にぎやかに楽しみながら調理に挑みました。そして、試食です。「おいしい」という人、異文化の味をたしかめる人、それぞれ食の異文化体験を楽しみました。

帰国者三世の進学ニュース

大きな夢の実現へ一歩

大学受験で、今年も明るいニュースが届きました。この春、樺太帰国者三世の二人、中国帰国者三世の二人が難関と言われる国公立大学への入学を果たしました。

センターで進学相談にあたっていたAさんは秋田市の国際教養大学、Bさんは小樽商科大学へ入学しました。ほかに中国帰国者三世Cさんは東北大学、Dさんは北海道教育大学へ入学しました。それぞれ将来に大きな希望をもっています。夢の実現に一歩を歩みだしました。

子供達の進学は、家族にとっても大きな自信、励みになるものです。センターには届いていませんが、今年も他にも多くの帰国者の子供達が進学を果たしたと思います。二つの文化、言語を持つ帰国者の子供たちは、新たな未来を切り拓く担い手になることでしょう。

厚生労働省　全国担当者会議・センター連絡会議

帰国者のこと、子供たちに伝えよう

毎年厚生労働省が開いている全国の市町村の帰国者支援の担当者を集めた会議が、5月19日に東京の厚生労働省で開かれました。本年度は、二・三世の就労支援を重点に取り組むこととして、各自治体への協力要請がありました。これに関連して、本センターが、就労支援の取り組みついて発表しました。

続く翌20日には、全国のセンター連絡会議が開かれました。厚労省中国残留邦人等支援室から、本年の重点として、二・三世への就労支援事業とともに、今年は新たに文部科学省が行う小学校の土曜学習応援団に協力して帰国者問題の子供の世代へ伝えるための継承事業への取り組みが示されました。そして、これまでの地域で帰国者の安心を支える地域生活支援推進事業も、ひきつづき取り組むことになりました。

7月・8月・9月の行事

7月12日	帰国者介護予防サロン(委託)
7月13日	サクランボ狩り交流会
7月16日	旭川・おしゃべり交流会
7月30日	稚内・利尻島島めぐり見学会
8月2日	帰国者介護予防サロン(委託)
8月30日	DVD上映会
9月14日	日本の家庭料理教室
9月	旭川・稲刈り体験交流会

●●編集後記

戦後70年、新聞、テレビで帰国者報道が目につくようになってきました。筆舌に尽くしがたい体験を抱える帰国者のみなさん、家族を失った悲しみ、棄てられたという強い思いがあります。今号で取り上げた日本語学習、聞いてみると、学ぶ熱意の中に失われた時間、人生を取り戻そうとしていることがわかります。その人たちが、70歳を超えて「二度と繰り返してはならぬ」と一様に語ります。伝えたい「人生」です。(K)